

# 日本子どもパネル調査 ニュースレター 2015

研究責任者からのご挨拶  
アンケート調査分析結果より  
研究者紹介  
よくあるご質問

本のご紹介

ジェームズ・ヘックマン著『幼児教育の経済学』  
「お子様に関する特別調査」ご協力のお願い



Freepik.com



はじめまして。私は、皆様とお子様にご協力をお願いしております、「**お子様に関する特別調査**」の調査設計・実施の責任者を務めています。私たちの学術調査研究にご協力をいただきありがとうございます。

皆様にご協力いただいた調査は経時的にまとめられ、「**日本子どもパネル調査 (Japan Child Panel Survey: 略してJCPS)**」という名で、多くの研究に利用されるようになってきております。そこでここでは、JCPSが国内外でどのような意義を持っているかをご説明したいと思います。

皆様は、大切なお子様が、その持てる力を最大限発揮できるように願いながら子育てをされていると思います。少子化が進む日本では、子どものためにより良い政策はないか、家庭だけでは何が不十分かを明らかにするために、実態の把握と分析を行い、研究成果を社会に還元することが求められています。そのためには、お子様一人一人の個性と多様性を踏まえた上で、学力や心の成長過程を追跡し、ご家庭や学校・習い事などの情報も加え、それらの相互関係を分析することが必要です。しかし、それらをすべて満たした本格的な調査は日本では行われていませんでした。

世界的には、子どもを対象とした追跡調査は、経済学者・心理学者などの研究グループにより30年前から行われており、多くの国が調査結果を政策に活かしています。米国では、Children of National Longitudinal Survey of Youthという調査が1986年から、Early Childhood Longitudinal Surveyという調査が1998年から、英国ではMillennium Cohort Survey が2001年から、ニュージーランドではGrowing Up in New Zealand が2009年から、オーストラリアではGrowing Up in Australia が2004年から、アイルランドでは2006年にGrowing Up in Irelandが、中国では「中国家庭追跡調査」が2010年から、それぞれ始まっています。



### 世界の子どもパネル調査

左から、米国、ニュージーランド、オーストラリア、アイルランドの調査のシンボルマークです。



そこで私たちの研究グループでは、**子どもの学力や心の成長を世界各国と比較できる継続的な調査を日本で初めて**立ち上げました。それが「**お子様に関する特別調査**」であり、JCPSなのです。

JCPSは日本の子どもの成長の多様性と特徴を測る唯一の貴重な追跡調査であるため、皆様のお子様には、世界中で調査に参加している子どもたちと同様に、可能な限り継続的に調査にご参加をいただきたいと思っております。どうか皆様のご理解をいただけますようお願い申し上げます。

私は、2015年10月にSociety for Longitudinal and Life Course Studies (ライフコース追跡調査学会) という国際学会に参加してきました。この学会は、子どもや大人の追跡調査を分析する研究者が集まり、研究報告をする場です。この学会を始めとして、世界中の研究者が、日本の子どもたちの成長過程に関する分析結果に強い期待と関心をもっています。

また、2014年10月には、子どもの教育と発達の分析で世界的に名高いジェームズ・ヘックマン教授が、慶應義塾大学で特別講義を行いました。ヘックマン教授はノーベル経済学賞受賞者で、特に幼少期の教育投資の重要性について数多くの研究を行っています。ヘックマン教授は講義の中で、皆様のご協力で得られたデータの一部を米国と比較し、このような継続的なデータの収集と分析の重要性を説明されました。**このニュースレターの最後でヘックマン教授の書かれた本を紹介していますので、ご関心のある方は是非ご覧になってください。**また、慶應でのヘックマン教授の講義は、慶應義塾大学のホームページから動画(英語のみ)で見することもできます。



講演をするヘックマン教授

(<http://ies.keio.ac.jp/sp-events-fukuzawa/20141007>) このような国際的な比較研究も、皆様のご協力があることであることを私たち研究グループは深く感謝をしております。皆様のお子様たちの健やかな成長を祈りながら、今後も引き続き、私たちの調査にご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

赤林英夫

慶應義塾大学経済学部 教授：シカゴ大学博士課程修了(経済学博士)。世界銀行コンサルタント、ハーバード大学日本研究所等を経て今に至る。家庭では中学生の女の子と高校生の男の子の父親として奮闘中。

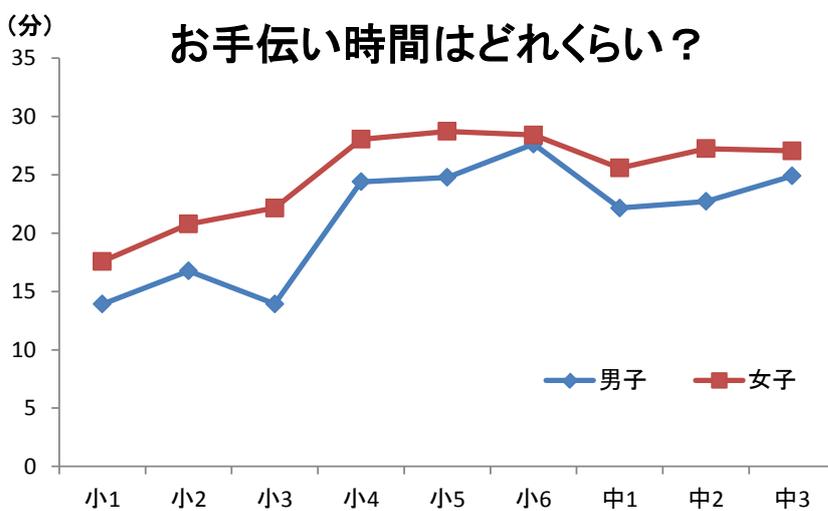


## アンケート調査の分析結果より

ここでは、「お子様に関する特別調査」の調査結果の一つを紹介させていただきます。**今回のテーマは「お手伝いの時間」**です。「お子様に関する特別調査」に回答して下さっているお子様のお手伝い時間はどれくらいか、男の子と女の子で違いはあるのか、勉強時間との関係は？といった点について紹介いたします。

「お子様に関する特別調査」では、小学校1～3年生のお子様の場合は親御様に、小学校4年生以上のお子様の場合はお子様ご本人に、「学校がある日（月曜日～金曜日）の放課後の過ごし方」について尋ねる設問がございます。その中で、「家のお手伝いをする」という項目に対して、「しない」「30分くらい」「1時間くらい」「2時間くらい」「3時間以上」のいずれかを選んでいただいています。今回の分析では、それぞれを「分」に直して計算を行っています（「1時間くらい」でしたら60分としています）。

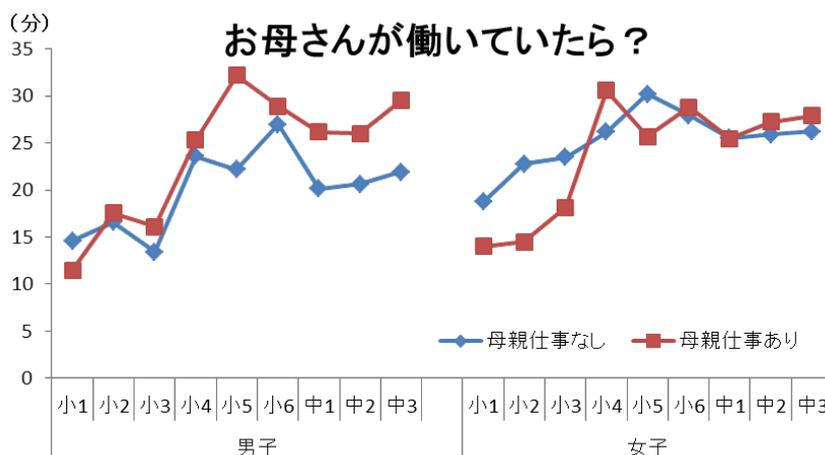
下の図は、お手伝い時間の平均値を学年別、男女別に示したものです。これをみますと、平日の一日で大体20～30分ほどお手伝いを行っているようです。男女別でみると、男の子よりも女の子の方がお手伝い時間が長いようです。また、学年別で見ますと、小学4年生～6年生で高く、中学生になると少し減少する傾向がみられます。中学生になると、学校で過ごす時間も長くなり、学習内容も難しくなるため、お手伝いに割く時間が短くなっているのかもしれない。



次に、**母親の就労状況とお手伝い時間**の関係をみていきます。下は、母親が働いているかどうかに分けて、お手伝いの時間を図にしたものです。これを見ますと、母親が働いているご家庭の男の子の方が、母親が働いていないご家庭の男の子よりもお手伝い時間が長いことが分かります。

上の図では、男の子の方が、女の子よりお手伝い時間が短い傾向にありましたが、母親が働いている場合は、男の子も女の子と変わらないくらいお手伝いをしているようです。一方で、女の子は、お母様の就業に関わらず、お手伝いを行っているようです。

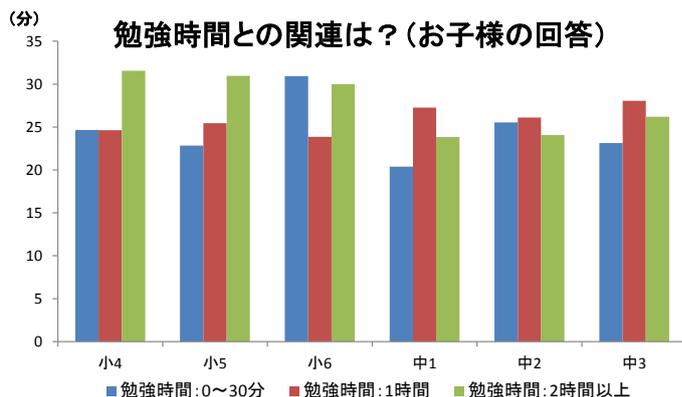
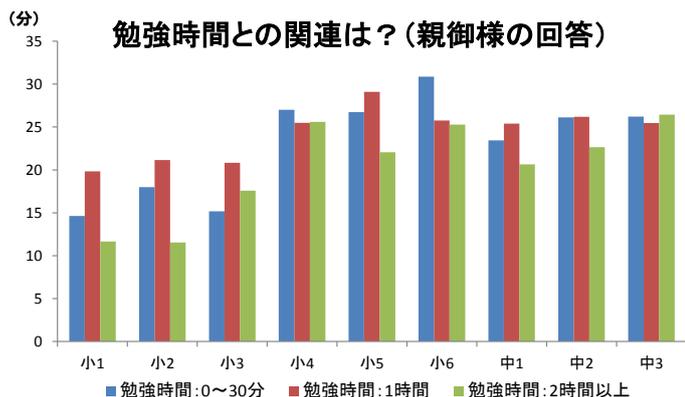
小学校低学年の女の子は、母親が働いていない場合の方がお手伝いの時間が長いようですが、これは、お母さんと一緒に楽しくお家のことをする時間が長いのかも知れませんね！



お手伝い時間との関わりで気になるのが「**子どもの勉強時間**」です。「お子様に関する特別調査」では、普段、学校から帰ってからの勉強時間を尋ねています。この設問は、親御様に全ての学年で聞いていると共に、小学校4年生以上のお子様ご本人にも回答していただいています。

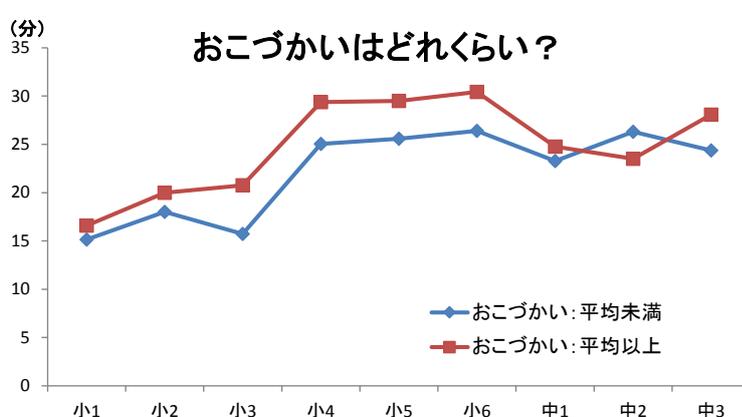
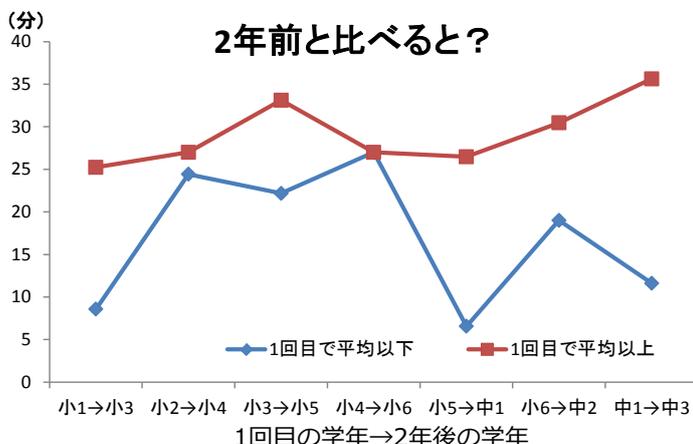
下の図では、勉強時間ごとの平均お手伝い時間を示しています。これをみますと、親御様の回答でもお子様の回答でも、勉強時間が0～30分のお子様の平均お手伝い時間が一番多くなることは少なく、勉強時間が短ければお手伝いをする、という傾向はあまりなさそうです。（むしろ、小学校4・5年生のお子様の回答では、勉強を2時間以上する子のお手伝い時間が長いようです。）このように、勉強時間とお手伝い時間との関連はなさそうなことが分かりました。

一方で、お手伝い時間に関わるものとして、習い事や部活動も考えられます。しかし、この設問では、「塾や習い事、クラブ活動のない日のことをお答えください。」と明記していますので、これらの影響はないものと考えられます。実際に、クラブ活動の回数や習い事の回数とお手伝い時間を比べてみましたが、特段の傾向はないことが分かりました。



「お子様に関する特別調査」は、同じお子様に概ね2年ごとに回答をお願いしております。そのため、2回ともご回答いただいた方については、1回目の結果と2年後の状況を比べることができます。左下の図は、1回目のお手伝い時間が平均以下だったお子様と平均以上だったお子様にわけ、その2年後の平均お手伝い時間を示しています。こちらをみますと、1回目が平均以上だったお子様は2年後のお手伝い時間もやはり長いことが分かります。特に、中学生にあがる学年になりますと、1回目のお手伝い時間が長いお子様は、さらに長くお手伝いをしている様子が見えます。

最後に、**お手伝い時間とおこづかいの関係**についてみていきます。1カ月のおこづかいの平均は、小1：238円、小2：278円、小3：430円、小4：549円、小5：631円、小6：854円、中1：1517円、中2：1777円、中3：2184円でした。右下の図は、学年別平均よりおこづかいが多い子どもと少ない子どもに分けて、お手伝いの時間を示しています。これをみますと、お手伝い時間の長い子どもの方がおこづかいを多くもらっているようです。しかし、その差は小学生（特に高学年）でははっきりと見られませんが、中学生になるとあまり差はなさそうです。



調査では他にも、「テレビを見る」、「ゲームをする」、「友だちと遊ぶ」、「児童館・学童クラブへ行く」、「スポーツをする」、「本を読む」、「宿題をする」時間の質問があります。これらの時間とお手伝い時間との関連をみますと、これらの活動時間が長いお子様の方がお手伝い時間が長い傾向がありました。ただし、ゲームだけは例外で、小学校低学年で、ゲーム時間が長いとお手伝い時間が少ない傾向にありました。ゲームは、お手伝いには少しだけマイナスなのかもしれません。

野崎華世 (高知大学人文学部 講師)



## 研究者の紹介

中村亮介  
(福岡大学経済学部 講師)



いつも「お子様に関する特別調査」にご協力いただきまして、誠にありがとうございます。私は研究責任者である赤林英夫教授のもと、「お子様に関する特別調査」として収集されたデータの分析に約5年間携わってきました。

この調査には、子どもの学力を含めた成長には何が重要なのか、親はどのように子どもに関わっているのかなどを明らかにするという目的がございます。皆様のご協力のおかげで徐々にではありますが、これらの目的が果たされようとしています。今回はその研究の一端をご紹介します。

子どもを育てていくにはとても多くのお金がかかります。子どもへのおこづかいや子どもと一緒に旅行する費用もそうですが、特に子どもの習い事や学費などへの支出が子どもの将来のために大事なものであるとお考えではないでしょうか。私たちは皆様にご協力いただいた情報を基に小中学生の子どもの習い事や教育費についての分析を行っています。

子どもたちの習い事の種類の種類は学年を経るにしたがってどんどん変化しています。子どもたちは低学年ではスポーツ系の習い事に参加し、小学校高学年、中学校へと上がるにつれて塾などの学習系の習い事へと変化しています。同時に教育費も子どもが中学生になると急激に増えていくことがこの調査から分かりました。また、経済学で広く知られている「子育ての理論：子どもの数と子ども一人当たりの教育費の関係」についても、この研究を通じて確認することができました。

皆様のご協力のおかげで、子育てに関する重要な事実が経済学的に明らかにされつつあります。今後とも「お子様に関する特別調査」にお付き合いいただければ幸いです。

### 略歴

慶應義塾大学大学院経済学研究科修了、博士（経済学）。  
日本学術振興会特別研究員などを経て現職。

敷島千鶴  
(帝京大学文学部心理学科 准教授)



私たち人間はなぜ一人一人こんなに違うのでしょうか。教育が異なるからでしょうか。家庭が異なるからでしょうか。生まれ持った素質が異なるからでしょうか。そんなことを知りたくて、2002年、我が子が小学生になってから、大学院に入学しました。以来、私たちの個性を作る要因について、心理学の研究を行っています。

2010年、第1回目の「お子様に関する特別調査」の時、小学1年生だったお子様も、今では中学1年生。最年長の中学3年生だったお子様は、今や立派なご成人です。急速なご成長を遂げていらっしゃるこの時期のお子様、そして親御様と、研究を通して、ごいっしょさせていただくことができますことを大変うれしく思います。

繰り返し同じ質問に何度もご回答いただくことを大変恐縮に存じますが、数年を経て、お一人の同じ項目に対する回答がどのように安定しているか、あるいは変化しているかを、調べさせていただくことができれば、人間の心理的社会的行動に及ぼす家庭環境の影響を明らかにしていく上で、強力な証拠を得ることができます。

毎回の調査データを、まとめた成果として公表できるまでには長い年月がかかりますが、現在、ひとまず、2010年から2013年の調査データから見えてきたことを、私ども研究プロジェクトの経過報告として、1冊の本にまとめさせていただいています。今春、赤林英夫・直井道生・敷島千鶴編『学力・心理・家庭環境の経済分析』として有斐閣から出版の予定です。ぜひお手にとっていただき、皆様からこれまでに頂戴したご回答の分析結果を、ご覧いただけましたら幸いに存じます。

親子の皆様の継続的なご協力があって初めて私たちの研究は成り立ちます。今後ともどうか末永くご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

### 略歴

慶應義塾大学大学院社会学研究科修了、博士（教育学）。  
慶應義塾大学先端研究センター特任講師などを経て現職。

## FAQ よくあるご質問

### Q. この調査は何の役に立つのですか？

A. 子どもの学力や心理の調査はほかにもあります。国も「全国学力・学習状況調査」を実施し、国際的にも学力の比較調査が行われています。しかしそれらは、子ども一人一人特有の成長を把握できるデータではありません。小さい頃にはやんちゃだったお子さんも、ほとんどの場合、大きくなると落ち着いてきます。子どもはあるきっかけで大きく変わりますが、私たちの調査は、そのような子どもの成長の個性を踏まえた分析を行うことのできる、唯一の全国調査なのです。その分析結果を広く共有することで、子どもの個性を踏まえた子育ての意義を理解し、政策に活かすという、非常に大きな役に立ちます。また、海外の結果と比較をすることで、世界中の研究者が日本の子育ての意義を学ぶことができます。



### Q. 子どもの調査には毎回参加しなければならないのですか？

A. 任意の調査ではありますが、多くの方のご参加が得られれば得られるほど正確な資料となります。子どもの成長は誰一人同じではありません。お子様一人一人の育ち方の個性がデータに反映されるためには、可能な限り多くの方が継続的に調査に含まれることが必要です。今、日本を含むアジアの子育てが世界的にも再評価されており、多くの国の方が、日本の子どもがどのように育っているのか、その様子を正確に知りたいと思っています。皆様のご回答は世界的にも貴重な資料となりますので、どうか継続的に調査にご協力をいただけますようお願いいたします。





ジェームズ・J・ヘックマン著・  
古草秀子訳・大竹文雄解説(2015)  
『幼児教育の経済学』  
東洋経済新報社

“公平/平等な社会の実現”は諸外国においても解決すべき重要課題であり、その過程において教育の重要性が多くの人々に認識されています。本書では、教育のなかでも就学前教育に着目し、その効果と効果が生み出されるメカニズムについて、実証的に議論を行っています。

本書の魅力は、なんとといっても、**2000年にノーベル経済学賞を受賞されたヘックマン教授**（シカゴ大学）の研究に触れることができる点です。また本書では、アメリカを代表する社会学者、心理学者、教育学者などが行った、同教授の研究に対する評価や指摘にも触れることができる点も大きな特徴です。就学前教育をめぐる最先端の知見に触れることは、みなさんの知的好奇心を呼び起こしてくれます。

本書では、アメリカの3歳から4歳の子どもを対象とした約40年間の追跡調査を行ったペリー就学前プロジェクトにもとづき、就学前教育を受けた人の方が、学力テストの結果、高校卒業率、非逮捕者率、月給、持ち家率、生活保護の非受給率などにおいて、プラスの効果が現れていることが提示されています。また同様の調査として、アベセダリアンプロジェクトがありますが、その結果でも、就学前教育を受けた人の方が、プラスの結果が得られていることが示されています。その要因の1つとしては、協調性や忍耐力といった非認知能力が高いことが指摘され、就学前教育の時期がその形成に重要な時期であることが主張されています。

「アメリカの実態は理解できたけど、日本の実態はどのようになっているのか？」日本の読者としては、この点が気になることと思います。大竹文雄教授（大阪大学）が同書の中で解説を行っていますが、そこで、日本における重要な研究として、**日本子どもパネル調査を用いた私たちの論文を紹介しています**。また、著者であるヘックマン教授も慶應義塾大学での講演で、日本子どもパネル調査の重要性を評価しています。皆様にご協力をお願いしています『お子様に関する特別調査』は始まってまだ5年ですが、すでに、日本の代表的な研究データとして認知されて、期待が寄せられています。

山下 絢（日本女子大学人間社会学部 准教授）



## 本年度も「お子様に関する特別調査」へのご協力をお願いいたします

### 「日本子どもパネル調査(JCPS)」について

JCPSは、2010年より慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターで実施する『お子様に関する特別調査』のデータを経時的にまとめたものです。これまで、延べ 2,015 のご家庭と、5,915人のお子様にご協力をいただき、多くの研究成果が発表されてきました。JCPSは、子どもの個性を踏まえた成長のさまざまな側面を分析できる我が国唯一のデータとして、国際的にも利用されることとなっています。

### 本年度の調査の実施について

2016年2月に、2年ぶりの『お子様に関する特別調査』を実施いたします。日本の子どもの成長を国際比較できる貴重な資料となりますので、どうか皆様の温かいご協力をお願いいたします。

今回は、これまでご回答をお願いしていました小中学生のお子様とその親御様に加え、生年月日が平成21年4月2日から平成25年4月1日までの就学前のお子様の親御様に対しても実施させていただくこととなっております。

### 調査にご協力をいただけます場合

以下の調査票をお送りいたします。

**親御様へのアンケート：**お子様の子育てや生活についてのご質問です。

- お子様が小中学生の場合、お子様1人につき6ページ程度、所要時間は約10分です。
- お子様が就学前の場合、お子様1人につき12ページ程度、所要時間は約25分です。

**お子様へのアンケートとテスト：**

- 小中学生のお子様ご自身にお答えいただけます。算数/数学・国語等のテスト問題と簡単なアンケートが含まれます。所要時間は約20～30分です。

- ご協力いただきました方に**薄謝（図書カード）**を用意しております。
- さらに、ご協力いただきます**お子様全員に慶應マーク入りの粗品**を進呈いたします。
- 調査の実施にあたっては、情報の管理を徹底いたします。特にお子様の調査票はシールで封印していただいた上で回収いたします。また、個人情報は調査会社のみで管理し、ご回答を分析する研究者には、個人が特定できないようにいたします。



調査ご参加へのお願いを同封しましたので、どうかご協力をいただけますようお願いいたします。